

人と人とのネットワークで国際貢献する

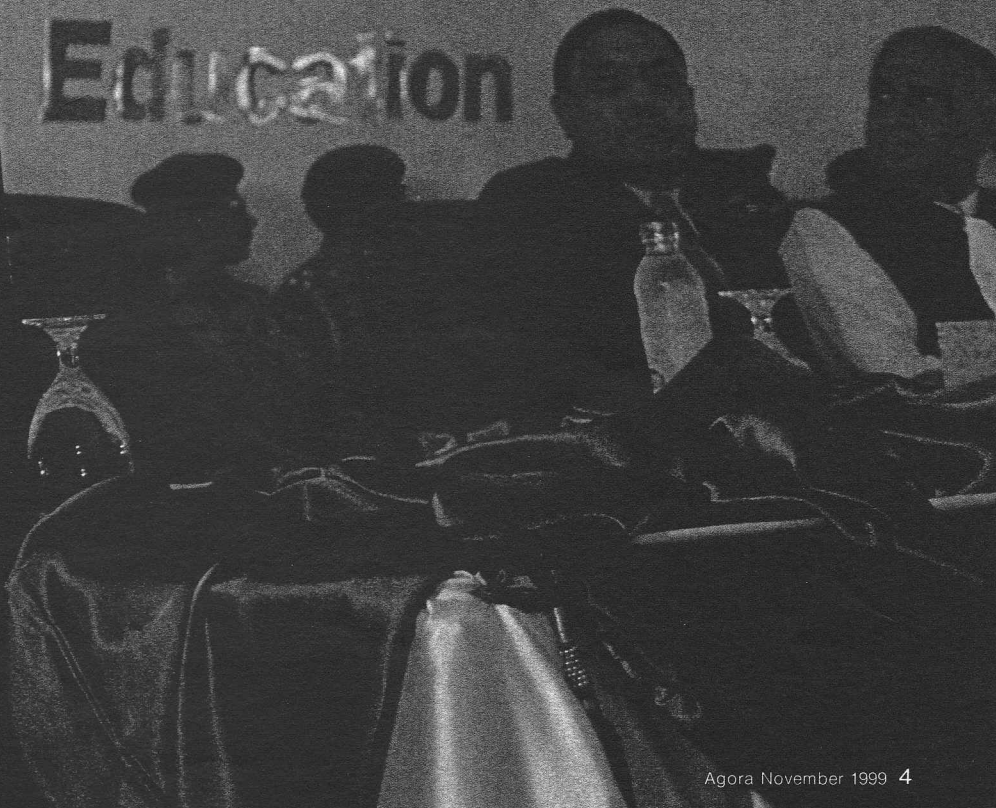
われら地球人

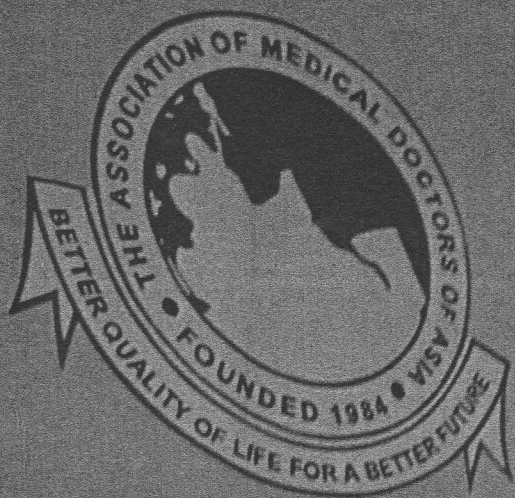
菅波 茂

文 藤原 健 撮影 高橋 昇

15th AMDA International
Conference 1999
Karachi
City Development
through
Education

第15回AMDA総会が、今年8月27日から29日までパキスタンのカラチで行われた。大統領出席のレセプションで挨拶する菅波さん。



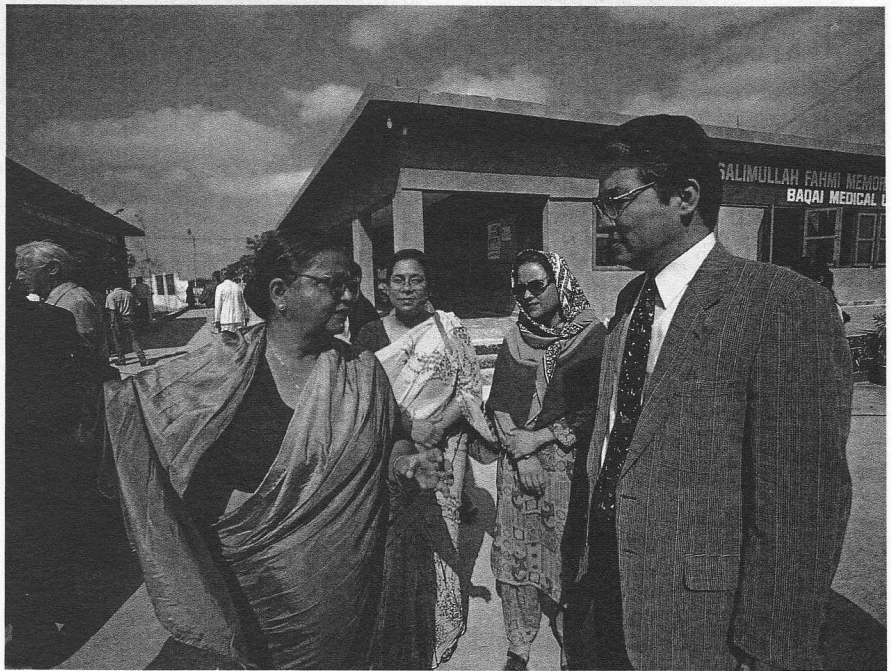


災害時の緊急援助、
病院建築を通しての地域医療への貢献、
国境を越えて医療活動を行うNGO団体の
AMDA (アジア医師連絡協議会)を15年前に設立した菅波茂さん。
医学生時代からアジアに魅了され、
多くの国際会議を開催することで
各国の医師・医学生たちと信頼関係を築いてきた。
AMDAはその結びつきを基盤に、
カンボジア、ソマリア、コソボなど、
現地の医師・団体と共同して
プロジェクトを展開している。
阪神・淡路大震災の際には
各国からのボランティアの受け入れも経験した。
「困ったときはお互いさま」
という相互扶助の精神のもと、
国際貢献を進めている。

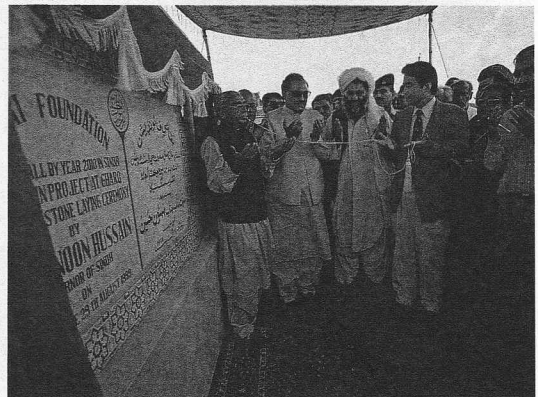
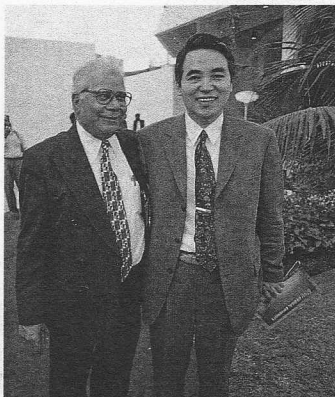
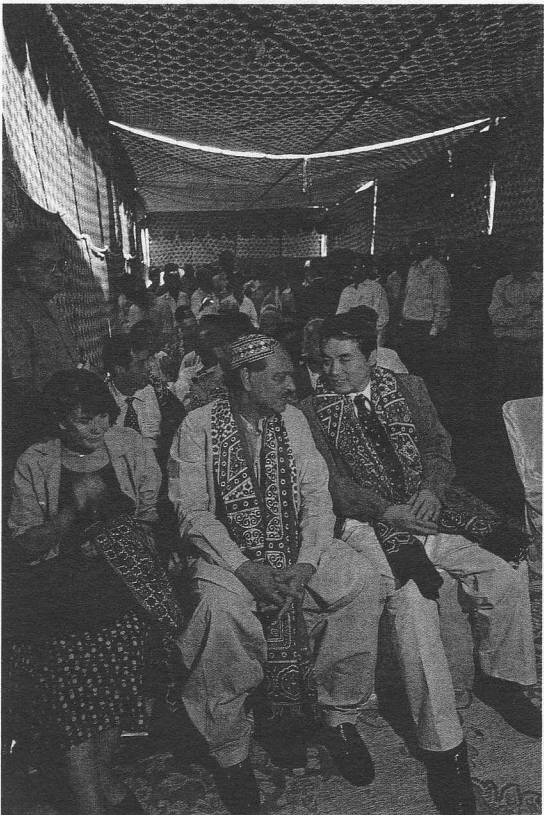


(上)総会には、AMDAインターナショナルの各国・地域支部から代表が集まる。バカイ大学内の小学校では子どもたちが迎えてくれた。

(右)パキスタンで協力して活動をしているバカイ大学を視察する。案内しているのはAMDAパキスタン代表のザヒダ・バカイ医師。



(下)カラチ郊外のタッタに新設される大学のレセプションにて。カラチ市のあるシンド州知事と話す菅波さん。今回の訪問は、イスラム圏の地域でAMDAが緊急医療活動を行うための人脈づくりにも繋がっているという。



(上)新設される大学の起工式。(左上)バカイ財団総帥で、バカイ大学学長のF.U.バカイ医師と一緒に。

(左)客人を手厚く迎えるのがパキスタンの流儀。訪問団一同はカラチのあるシンド州知事より記念品を贈られた。

シユバイツァーに憧れ 医師の道に

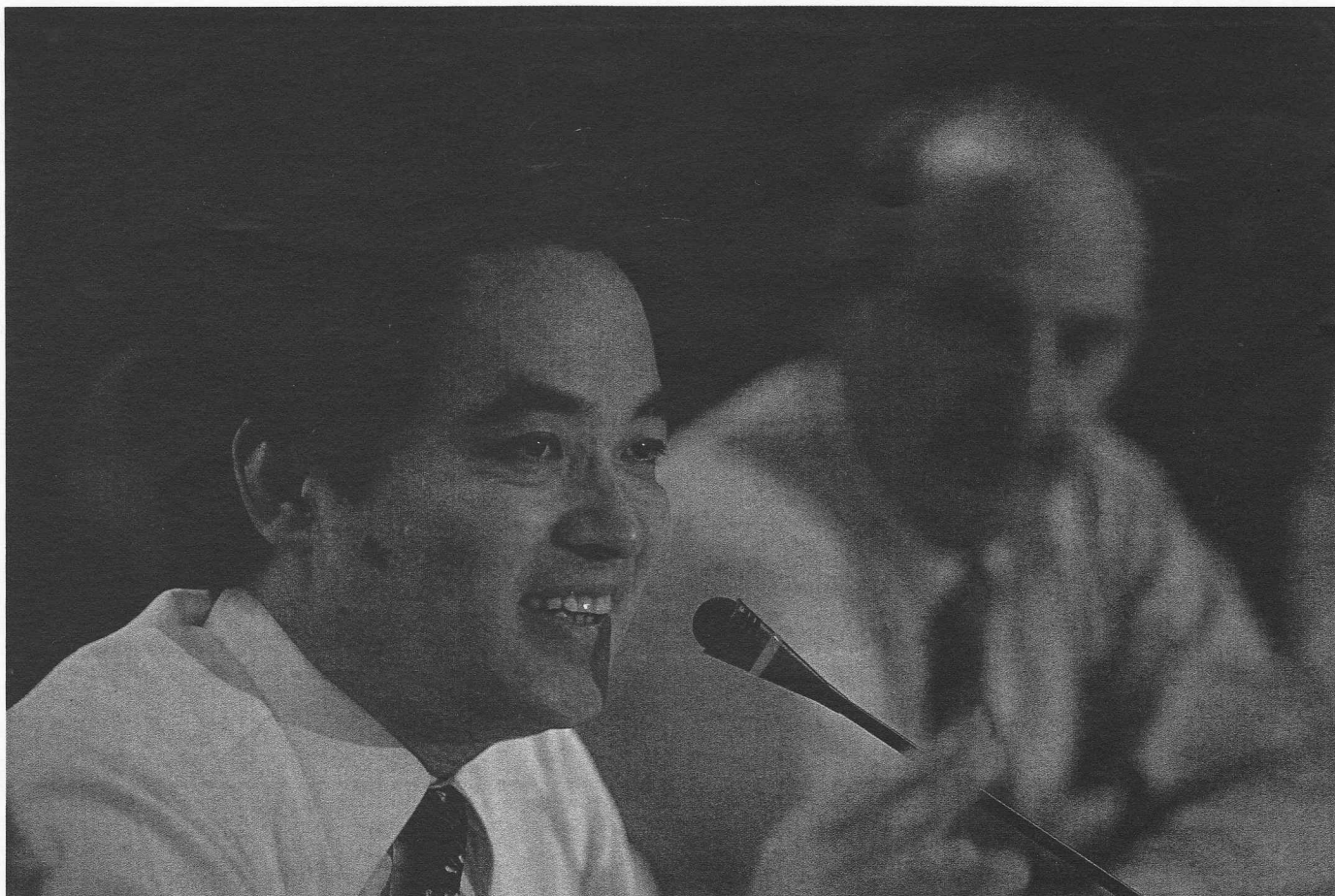
高校生時代に目にした一枚の写真と父のさりげないひとことが、菅波茂さんのその後の人生の大病を決めた。

その写真——第二次世界大戦当時のニューギニア戦線で、若い日本兵が海岸の砂浜に半ば埋もれて死んでいた。菅波さんは思う。「日本人は、死を賭してまで何のためにアジアに出かけて行つたのか。アジアと関わるには、こんな形でしかなかったのか」

父の言葉——「シユバイツァーのような医師の道を選ぶのも悪くない」

自然災害、内戦による難民流出……。この地球上で今、繰り返される悲惨な状況にあえぐ人たちは絶えることがない。そのニュースを耳にすると、AMDA(アジア医師連絡協議会)はスタッフを組織し、すぐに現地に救援隊を送り込む。

菅波さんはこのAMDAを二五年前に結成し、代表を務める。本部は岡山市。菅波さんの運営する病院の一角に、本部事務局がある。二〇を超える海外の支部。会員の医療関係者は約二〇〇〇人。日本で生まれた最大の国際医療救援団体のリーダーは、少年時代の熱い思いを五〇歳を超えた今も持ち続



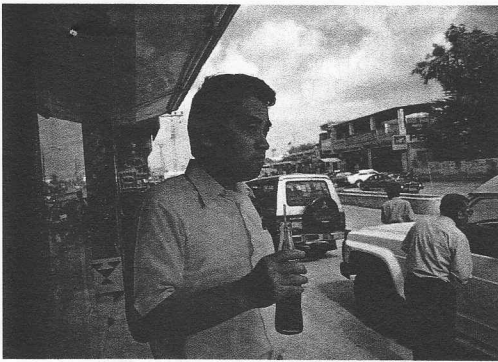
(上2点の上と左)AMDA総会では、各国の代表たちによって、これまでの15年の歴史を振り返るとともに、今後の15年に向けての行動指針や、組織のあり方などが議論された。AMDA代表選挙では、全員一致で菅波さんが信任された。(上)夕方のレセプションにて。右から、菅波さん、F.U.バカイさん、タラル大統領らが並ぶ。

アジアに魅せられ 医師の輪をつくる

祖父は裁判官。父も法学部出身の教員。法曹界への道も頭をよぎったが、父のアドバイスもあって、自身は医学部に進学する。当時、全国の大学で学園闘争の嵐が吹き荒れていた。社会科学系が得意だった菅波さんが、そんな雰囲気に関心でなかったはずがない。しかし、論争のための論争は好まなかった。心の奥底に沈殿していた「アジアへの思い」のほうが、沸騰していた。趣味の尺八を片手に八カ月、アジア放浪の旅に出る。

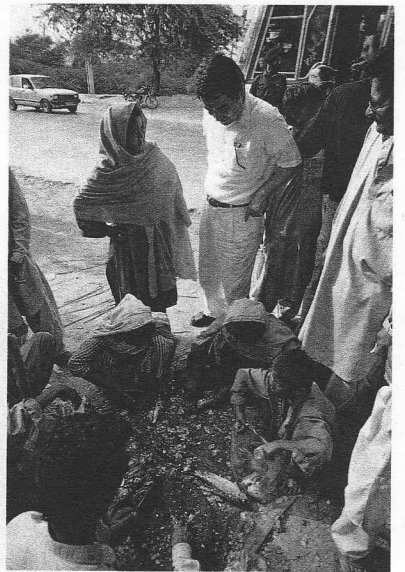
帰国後、タイの医療状況を視察するクワイ河医学踏査隊を組織。学内でアジア伝統医学研究会も発足させ、会に集まってくる後輩の医学生に刺激を与えながら、岡山市内の病院でインターンに携わる一方、アジアとの関わりを持ち続ける。毎日新聞岡山支局で駆け出し記者だった私との出会いは、その頃だ。

後輩に交じっても現役の医学生と変わらない童顔に笑みを浮かべ、「日本版の『国境なき医師団』をつくりたいです」と語り続けていた。「まさか……」。当時の日本で、海外での緊急救援に携わるケースなど聞いたことがなかった。「アジアが呼んでいるんです」。放浪体験を



(上)コーラで一休み。菅波さんは医学生時代に放浪旅行で訪れて以来、中近東の医学の中心でもあるパキスタンをたびたび訪れている。

(下)地元の子どものための学校で、牛やロバと一緒に暮らす子どもたちがいた。彼らの笑顔に、深夜にまで及んだ会議の疲れも吹き飛ばす。



(右)カラチ郊外で、道端の小さな広場に魚を扱う市場ができていた。市場で働く子どもたちに話しかける菅波さん。

(下)タッタの新設大学予定地にて。各国・地域の支部代表たちに囲まれて。AMDAは彼ら医療関係者の連携により活動している。

すがなみ しげる さん

1946年広島県生まれ。79年、岡山大学医学部在学中に10ヵ月間のアジア放浪の旅に出て、その多様性に魅了される。

岡山大学クワイ河医学踏査隊、岡山大学アジア伝統医学調査隊などを組織し活動する。

アジア各地の医師・医学生と連携し、西日本アジア医学生連絡協議会、アジア医学生連絡協議会、アジア医師連絡協議会、

アジア多国籍医師団などの活動を展開、84年にNGO組織AMDA（アジア医師連絡協議会）を設立する。

AMDAは20ヵ所の支部を持ち、約2000人の医療関係者が参加している。



口にし、医師の枠にとられない大きな発想をする菅波さんに、なぜか、私は引き込まれた。

後輩たちが「西日本アジア医学生連絡協議会」をつくり、アジア各国の辺境の地で医療調査を始める。私もその一隊に同行して、初めてタイ・カンボジア国境に足を踏み入れた。「やがて、あなたもアジアに魅せられますよ」。例の童顔と笑み。その予感半ば、当たる。

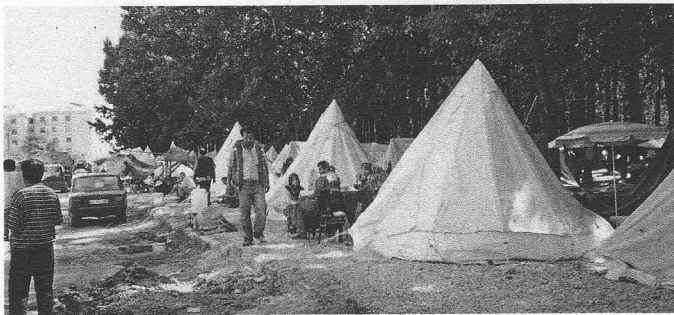
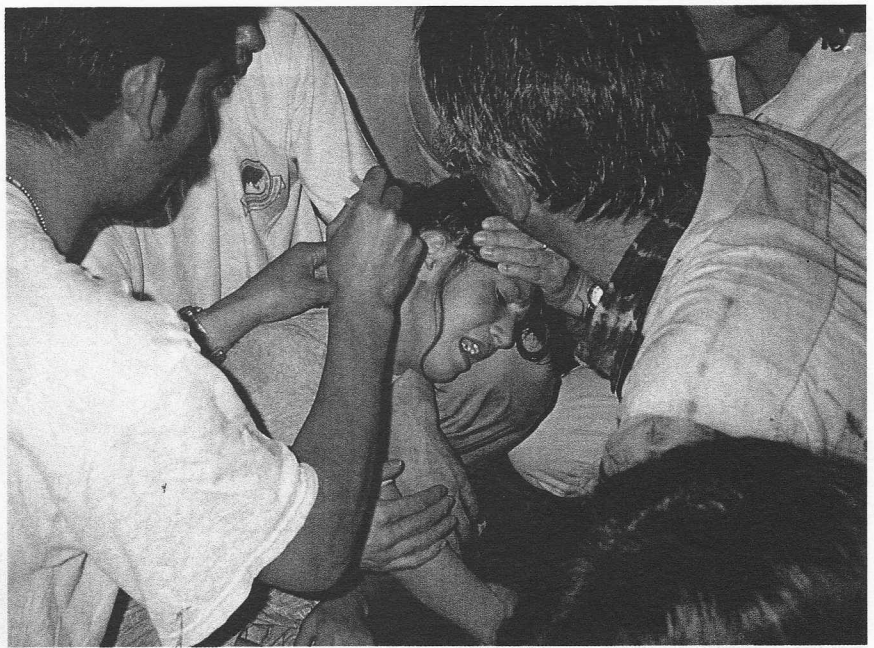
しかし、魅せられただけでは、何もできないことを菅波さんは知る。一九七九年、ベトナムが隣国カンボジアに侵攻したのをきっかけに、大量の難民がタイに流入した。菅波さんと医学生が現地に飛んだ。そこには、圧倒的な組織力を誇る欧米のNGO（非政府組織）がひしめき合って救済活動を行っていた。

「日本人はほとんどいなかったし、たとえ、いたにしても、ああした現場で何をしたらいいのかというノウハウは全くなかった」

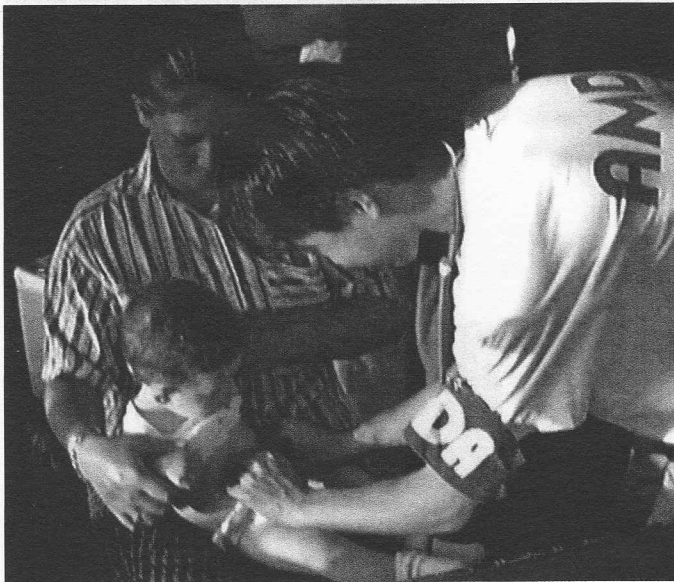
相手にならなかつたという、暗澹たる思いで帰国した菅波さんは、しかし、くじけなかつた。ここから、今に続く道への「出番」だったと言っても言い過ぎではない。

医学生の間で「西日本」のほかに、「東日本」も結成され、これが母体となってアジアにまで広がったのが、挫折の翌年の八〇年。タイ、バンコクにアジア各国の医学

(右) AMDAはコソボで難民緊急救援活動を展開した。デュラス近郊の村で診療する相原雅治医師。 (下)ローザン村の難民施設の様子。



(上)今年の8月17日トルコ北部で起こった大地震に緊急救援医療活動として5カ国からなる多国籍の医療陣を派遣した。(左上)震災で避難した人々。(左)治療する様子。(写真提供: AMDA)



生が集まって、国際的ネットワークができた。一連の仕掛け人は、もちろん、菅波さんだ。医学生はやがて医師になる。こうした医師のネットワークで、アジア版の国際救援組織ができるはずだ。この確信が八四年のAMDA発足で具体化する。

**「困ったときは
お互いさま」**

菅波さんは、カンボジア難民キャンプで打ちのめされた欧米の救援のありようを詳細に分析した。それは、「人権思想に裏打ちされた援助だった」と喝破する。アジアは多民族、多宗教。異教徒に肌を

見せないイスラムの民が、難民化したとき、宗教の違いが理由で欧米の医療を拒否して命を落とすケースもあった。では、欧米流の組織力、ノウハウを参考にし、「人間、かくあるべし」という人権思想を大切にしながらも、多様なアジアで行動を展開するにはどうしたらいいのか。

AMDAが救援活動を開始する場合、押さえておくべき原則は三つあるという。

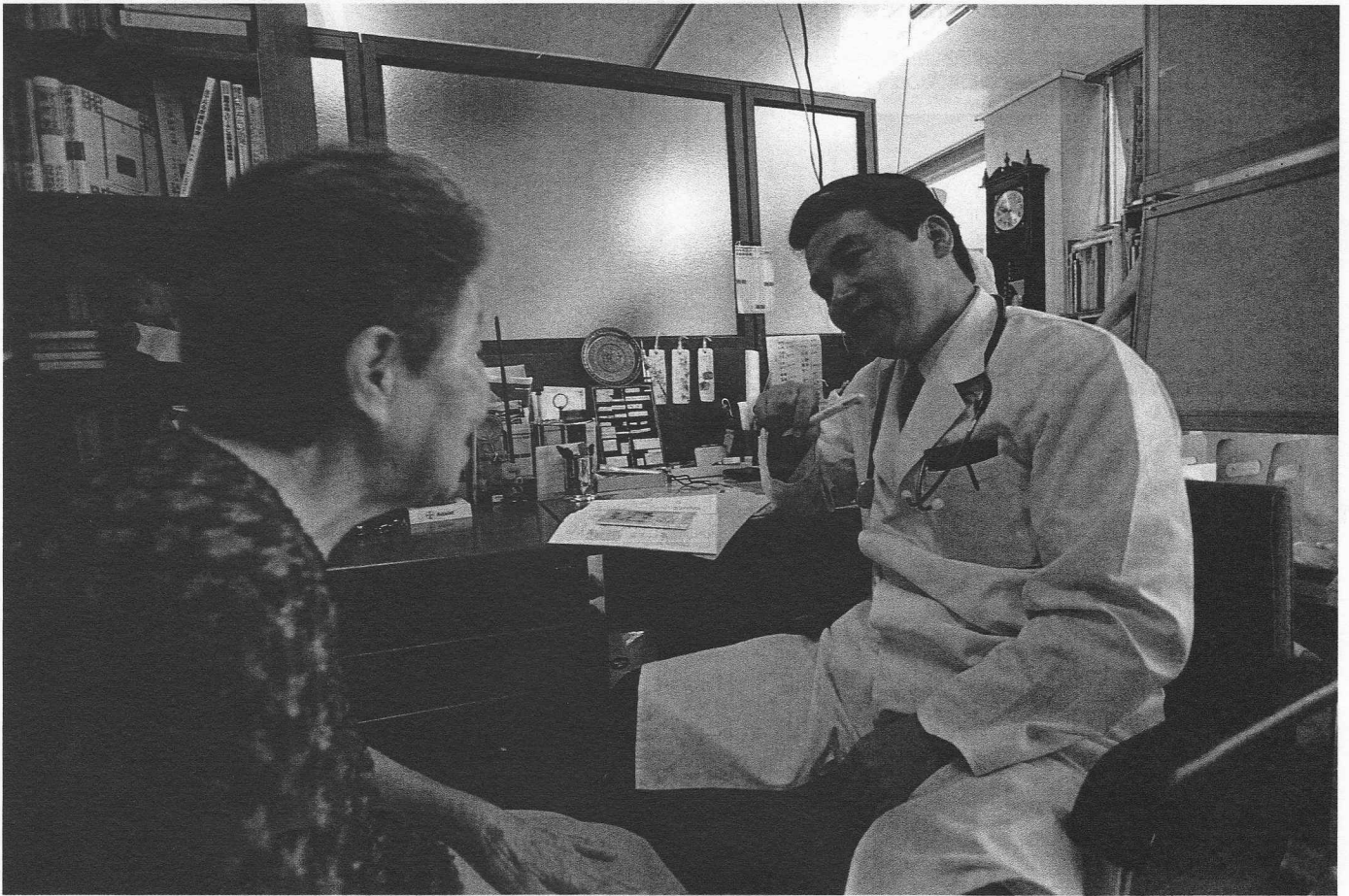
その一——誰でも、他人の役に立ちたいと思っている。

その二——この気持ちには、国境、人種、民族、文化などの壁はない。

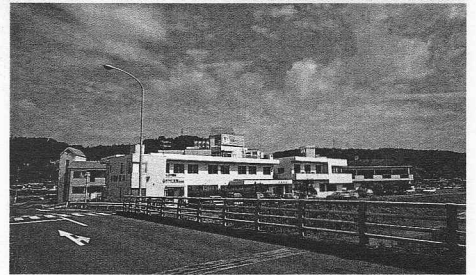
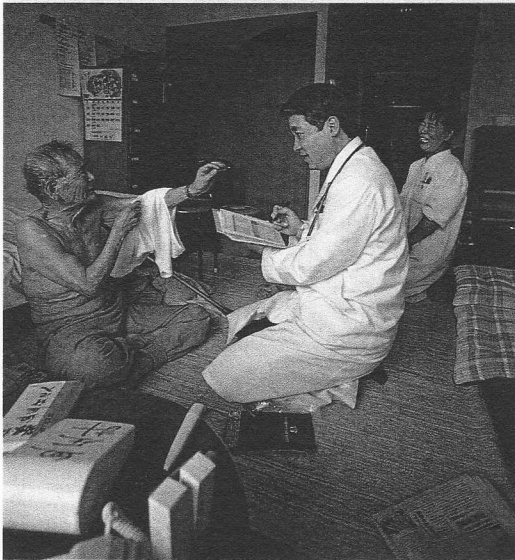
その三——援助を受ける側にもプライドがある。

この三点を理解したうえで、現地の人たちと接すること。「助けにきてあげた」という高所からの姿勢ではなく、「あなたも必要な人材だ」として、現地のスタッフと連携しながらコトを進めていく。なんとわかりやすい原則か。身を堅くして人権、ヒューマニズムを語る人からすれば、肩すかしを食ってしまいそうな言葉が並んでいるが、この「軽いノリ」が実は、菅波さんのしたたかなところであり、真骨頂なのだ。

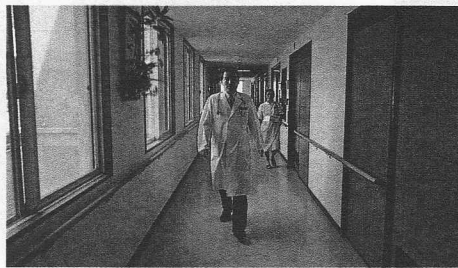
「アジアの中で共通するのは、困ったときはお互いさま」という心です。相互扶助といってもいい。



(上)81年に菅波内科を開業したときは、各国への医師の輪がここまで大きく広がるとは想像もできなかった。(左)「すこやか苑」で体調を尋ねる。菅波さんの哲学は、自ら岡山の地に根づいて人々と交わっている地域医療の現場から生まれる。



(上)岡山市の橋津にある菅波内科医院。妻の知子さんの歯科医院、老人介護施設などを併設している。(左)老人介護施設「すこやか苑」の各部屋を定期検診のために回る。



今は助ける側に回っているけれど、いつかこちらが助けてもらうことがあるかもしれない。援助を受ける側のプライドを決して傷つけることなく援助すること。このほうが継続していけるんじゃないですかねえ」

阪神・淡路大震災が起きた同じ年、九五年の秋、シベリアで地震があった。ロシア政府は日本政府からの救援隊は断ったが、民間のAMDAは現地に入った。

「政府が絡むと、こちらは『北方領土問題で借りをつくられる』と思ってしまったんでしょね。でも、AMDAは『阪神大震災で助けてくれたじゃないですか。今度は、そのお返しにきました』と説明して理解されました。政府のできないことも、私たちにはできたんです」

民間団体だからこそ独自にできる。相互扶助の精神は、国境の壁を越えうる行動原理だ。わかりやすさこそ、相互理解の突破口になる。これが、放浪体験を踏まえた菅波さんの論理であり、AMDAの戦略なのだ。

アジアから世界へ 活動の舞台は広がる

八月にトルコで起きた大地震でも、医療チームを送り込んだ。AMDAアルバニアの医師、コソボからの医師もAMDAのロゴマー



(上) AMDA本部は菅波医院の地下に設けられている。事務局のスタッフやボランティアの人たちに現地での活動は支えられている。



(右上) AMDA本部の緊急医療プロジェクト室にあるコソボ地区の地図。AMD Aメンバーの所在や難民キャンプの位置などが記されている。(右)災害や紛争時に緊急派遣を決断するのも菅波さんの仕事だ。

(下) 岡山大学医学部に通っている息子の由有さんと。



ク入りのシャツを着、腕章を巻いて被災者の救援を続けた。
 「多国籍の医師団が窮地に立った人たちに支援の手を差し延べ、困ったときはお互いさま」の関係をあちこちで取り結んでいくことが、最終的に戦争の防止につながるし、平和を創出することになると思うんです」

「国と国、人と人との関係には、三つのパターンがあります。まず、フレンドシップ。『ありがとう』をことさらに言わなくてもいい関係です。次にスポンサーシップ。これは援助する側とされる側がはっきり分かれている。最後にパートナーシップ。お互いの関係が対等ということ。私たちは最終的に、このパートナーシップが網の目のように地球上に張りめぐらされるのが願いです」

「戦争の世紀」「難民の世紀」と呼ばれた二〇世紀は、近く幕を閉じる。新しい世紀が後世、どう呼ばれるか。菅波さんはそのことを見据えて、今日もアジア・アフリカ各国に飛んだAMDAMEMBERの活動の指揮をとる。



ふじわらけん
 毎日新聞阪神支局長。早稲田大学政治経済学部卒業。早稲田大学大学院を経て毎日新聞社入社。一九八七年以降インドシナで取材。大阪社会部副部長を経て九七年から現職。著書に「沖繩、戦争マリアナ事件」(共著)「業書を追った記者たち」(同)。